小－17

ミコフェノール酸モフェチルが奏功した低形成性骨髄異形成症候群の犬の１例

○玉本隆司[1)]　小山ますみ[2)]　足立真実[1)]　五十嵐寛高[3)]
１）酪農大伴侶動物医療学　２）酪農大附属動物医療センター　３）酪農大生体機能学

【はじめに】骨髄異形成症候群（MDS）は１～３系統の血球減少、骨髄細胞の異形成、無効造血を特徴とする疾患であり、慢性骨髄増殖性疾患の一つに数えられる。MDSの多くは骨髄が正形成～過形成となるが、まれに低形成となるものが存在する。今回、低形成性MDSと診断した犬にミコフェノール酸モフェチル（MMF）を使用し、効果が得られたため、その概要を報告する。

【症例】トイ・プードル、７歳11カ月齢、避妊雌。１週間前より活動性の低下、発熱が認められ、対症療法を受けていたが改善しないとの主訴で来院した。来院時体温40℃、白血球数5,200/μl、PCV32％、血小板数80,000/μl、CRP5.0 mg/dlであった。検査を行ったが発熱の原因が特定できず、副腎皮質ステロイド剤による試験的治療を開始した。治療反応は良好であったが、漸減したところ発熱の再発が認められ、その際にPCV16％と重度の貧血が認められた。塗抹で再生像が認められず、またペルオキシダーゼ染色を行ったところ陰性好中球が認められた。骨髄疾患を疑い、輸血後に骨髄吸引検査を実施したところ、脂肪髄であり、骨髄低形成と考えられた。骨髄球系は低形成であったが、輪状核好中球が散見された。赤芽球系は分化成熟不全が認められた。以上より低形成性MDSと診断し、副腎皮質ステロイド剤に加え、シクロスポリンによる免疫抑制療法を開始した。しかし、貧血の改善は認められず、定期的な輸血を行わなければ維持できない状況であった。第363病日にMMFを15 mg/kg BIDで投与開始したところ、貧血の進行が徐々に緩やかになった。第427病日に輸血をして以降、輸血なしで第603病日時点までPCV25％前後を維持できている。

【考察】発熱の原因としてMDSは一般的ではないが、過去の報告では不明熱の110頭中８頭、あるいは66頭中２頭がMDSであったとされており、鑑別としては考えておく必要がある。犬のMDSは報告が少なく、治療法も定まっていないが、免疫抑制療法が奏功する場合がある。加えて、低形成性MDSは再生不良性貧血との類似性が指摘されており、再生不良性貧血でMMFが奏功したとの報告もあるため、今回使用した。低形成性MDSは非典型的な病型と考えられ、本症例での治療反応が他のMDSの症例にも当てはまるのかどうかについては、慎重に検討する必要があると思われる。